

# 8年ぶりの経験

派遣サポーター（平成27年度広島派遣参加） 井上 輝愛来

私は今回多摩市子ども被爆地派遣事業に派遣サポーターとして、8年ぶりに参加しました。派遣サポーターの役割は、自分の派遣員としての経験を運営に活かしていくことです。派遣員とコミュニケーションを取ったり、多摩市の職員の方と事業の計画を立てたりといった、両方の立場で参加させていただきました。8年前は派遣員として学ぶ側・参加する側に位置していましたが、今回は運営側としても関わらせていただき、8年前の当時の職員の方の苦労や大変さを身にしみて実感することができました。

派遣前の3回の事前活動では、職員の方と、どのように事業を進めていくのかを話し合い、コーディネーターである大学の先生方とのオンラインの打ち合わせにも参加しました。打ち合わせのあとは、次の活動までにさまざまな準備を整えるなど、たくさんの作業がありました。その他、派遣のしおりを制作したり、動画制作をしたりと、私が大学で学んでいるデザインを生かしながら、いろいろなことに挑戦しました。

派遣サポーターとしての活動の一つに、長崎訪問に向けて派遣員をコーディネートしていく過程がありました。そこで私が大切にしていたことは、派遣員とコミュニケーションをたくさん取り、さらに派遣員同士のコミュニケーションを増やしていくということです。そのために、できるだけ課題の話し合いだけでなく、他愛のない話もして相手に興味を持ってもらうように派遣員をサポートしていました。コミュニケーション能力は、誰かと何かを成し遂げる際に必ず必要になってくる力です。私は、自分の思うこと、やりたいことを整理し、それを言葉にして相手に伝えることで、初めて物事が進んでいくものだと考えています。この事業を通して、最初はなかなか交流できなかった派遣員たちが、徐々に私のサポートがなくても話し合いを始めたり、談笑したり、この事業外でも連絡を取り合っているところを見て、派遣サポーターとしてとても嬉しかったです。

今回の長崎派遣は、台風の影響で残念ながら現地に行くことはできませんでしたが、時間が限られたなかで職員の方々が新たな企画や代替事業を計画してくださり、それまでの3日間の事前活動の時間が代替事業にも活かされていると感じました。今後私が社会に出た際に、理不尽な理由や、やむを得ない理由で企画・計画が狂ってしまうことがあった時、その場で終わらせずに、いかに違う方向で何かできないか、他の方法はないかと立て直す力がどれほど重要かを、今回を通して強く実感しました。普段は関わることのない大人の方々と事業を進める経験を通し、話し方やプレゼンの仕方、タスクのこなし方など、大学生の私にとって良い社会勉強になりました。

また、派遣員と平和について話すなかで、子どもたちの柔軟な考え方や、純粋な感じ方に、はっとさせられることが何度もありました。私自身、歳を重ねていくにつれ少しずつ頭が硬くなり、固定観念に縛られていたのかもしれませんが。そんな感覚を取り払ってくれる子どもたちの柔らかな感受性に触れることができた、貴重な機会でもあったと感じています。

私は、デザインを学ぶ学生として、子どもたちのような柔軟な考え方を忘れずに、今後も平和について考え続け、平和に寄り添った作品を制作していきたいと思っています。そして、作品を通じて、周りの人々も巻き込んで、平和の大切さについて発信していけたらと考えています。